

サー・フィリップ・シドニー：その人生と作品について(その二)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村里, 好俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/2000002

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



サー・フィリップ・シドニー ——その人生と作品について（その二）

村 里 好 俊

三種の『アーケイディア』について

フランス王弟でカトリックのアランソン公爵と女王の結婚話に関して、熱心なプロテスタント主義を奉じたダドリ一家・シドニー家の者としてシドニーは、祖国全体のみならず、自らの一族の命運を左右する一大事と自覚して、女王に対して再考を促す公式書簡を送りつける。その結果、バランス感覚に優れ、中庸を重んじる女王の逆鱗に触れ、宮廷出入り差し止めを食らってしまう。

閑暇を持てあましたシドニーは、実妹メアリの嫁ぎ先、ペンブルック伯爵の田舎屋敷ウィルトン邸に寄寓して、メアリや、彼女が主宰する「小宮廷」に集う貴婦人や文人たちに楽しんでもらうため恋愛ロマンスや詩歌・詩論を書き継ぐ。それらはやがて『オールド・アーケイディア』、『アストロフィロとステラ』、『詩の擁護』として、シドニーが、かれの叔父レスター伯が総大将を務めたオランダ戦役に出征し、スペイン軍との交戦中に敵が放った鉄砲の流れ弾で負傷し破傷風のため戦没した後に、友人たちや実妹メアリの尽力にて出版されることになる。

シドニーの『アーケイディア』と名の付く作品は、三種類存在する。1580年の夏頃に完成したとされる「初稿（オールド・アーケイディア）」は、実妹メアリに対する作者の「献呈の辞」に依れば、「手慰み」であるから「手慰みに扱われて当然の代物」と言うが、約 180,000 語から成る長編で、意匠・内容の極め細やかさ、五巻に及ぶ歌交じりの散文で書かれた地の文と四つの牧歌集という仕上げ方等から判断して、極めて入念に計画実行された、優れた「牧歌的恋愛ロマンス」の完成版と評することが出来よう。しかし、この作品は、1907年にバートラム・ドベルが完全な形の写本で発見するまで、ずっと知られざるものであった。

その『オールド・アーケイディア』と呼ばれる「初稿」を1584年頃まで徹底的に加筆推敲し、散文の地の文の最初の三巻の終わり近くまで加筆推敲

した原稿は、作者がオランダ戦線に出掛ける前に友人のフルク・グレヴィルに託された。シドニー没後の翌年、ロンドンで国葬級の葬儀が岳父ウォルシンガムの費用負担で執り行われた後、1590年に未完成のままグレヴィルを中心とする友人たちの手で出版されたのが『ニュー・アーケイディア』と呼び習わされる作品である。これは、「初稿」に徹底的に手を入れ、これを二倍近くに膨らませたもので、未完でありながら、既に「初稿」全体と同じ位の分量がある。

シドニーの実妹ペンブルック伯爵夫人は、この未完作品の出版を不服とし、『ニュー』として書き上がった三巻の中途までの部分と、その後の三巻の後半、四、五巻の展開部分を『オールド』から継ぎ足し、繋ぎのための修正を加えた上で、無理やり完成版として1593年に出版した。作者の意図を忠実に再現したとは言い難いこの折衷版『ペンブルック伯令夫人のアーケイディア』がそれ以来ずっと読み継がれ、18世紀になって近代小説が盛んになる前は、英語で書かれた最も独創的な歌交じりの散文虚構作品として人気を博した。

『アーケイディア』の構造と内容について

『アーケイディア』には、新旧を問わず、巧みなプロットの展開、一連の強烈な状況描写、様々な人物類型の創造、一驚に値する大団円等が含まれる。物語は四六駢儷体べんれいの修辞文で高雅雄弁に綴られ、主要主題となる愛の情熱が、時には感傷的に、時には官能的に、時には知的な機知に富んで描かれている。それは単なる愛の物語を超えて、王権とその支配の座に就く者の義務・務めを扱い、公的出来事の本来的な差配の仕方、私的倫理の複雑で悩ましい諸問題に議論が及ぶ。

古来、理想郷とされて来たギリシアのペロポネソス半島の中央に位置するアルカディア国の大公バシリオスは、アポロンの謎めいた託宣を下されて王としての義務を回避し、アルカディアの深い森の中に妻ギネキアと二人の娘たちパミラとフィロクレア、そして特別に寵愛する羊飼たちと共に隠棲し、愚かなダメタスを忠義一徹の正直なダメタスと取り違え、彼の一家（妻マイゾ、娘モプサ）に大切な二人の姫君を託してしまう。

他方、マケドニア国のユアルカス王は、この物語の主人公の二人の王子たちの父であり、叔父でもあるが、正しい判断力を備えた正当な王の完璧な鑑とされる。二人の王子たち、ピュロクレスとムシドロスは、小アジア諸国で

の遍歴の旅を終え、故国へ帰国の途上で陰謀による船の火事・難破に逢い、期せずしてアルカディア国に辿り着き、二人の王女たち、フィロクレア姫とパメラ姫にそれぞれ恋をしてしまう。彼らは、個人的恋の要請と合理的理性的行動の要請とに挟まれて抗い、情欲の結果を忌避し私的高潔さを維持しようとする。

本作品は、基本的に、深刻沈着な恋物語であり、公的・私的人生における行為の諸問題に関わり、情感とユーモア溢れる、極めて質の高いロマンスに仕上がっていて、シドニーが『詩の擁護』の中で提唱している「悦ばしき教え」をまさしく実践している作品と言える。

シドニーの芸術的理想は明晰な構造の中に最大限の複雑精妙で多様な内容を実現することであったが、『オールド・アーケイディア』は、五巻(又は五幕)構成の悲喜劇であり、精妙なダブル・プロット(アルカディア大公バシリオス、公妃ギネキア、ピュロクレスの実父でムシドロスの叔父、マケドニア王ユアルカスに関わる二組の高貴な恋人たちのメイン・プロットと、羊番頭ダメタス、その妻マイゾ、その娘モプサに関わる喜劇的なサブ・プロット)を備えている。主要な筋は比較的少人数の人物たち(実質的には18人しか登場しない)で展開され、場所と時とが統一されている。ほとんどの出来事がアルカディア国の奥深い森の中にある二つの隠棲別荘付近で起きるし(二人の王子たちの小アジアの諸国での数々の冒険の旅は、語りの言葉で複数の人物から報告されるのみだ)、プロットは一年以内に限られて繰り返される。古代ローマの喜劇作家テレンティウスの五幕構造は、導入部、展開部、大団円で出来ているが、『オールド・アーケイディア』の筋を織りなす多種多様な織糸は複雑に絡み合い、三巻(三幕)にクライマックスが来て、四巻(四幕)にそれへの対抗運動が襲い、五巻(五幕)に大詰めが用意され、全く予期せざる^{アナタリシス}認知と^{ベリベ}運命の^{ティエア}急変が起きる。この意味で、本作は散文作品ではあるが、叙事詩的牧歌的悲喜劇の先例を創造したと言って過言ではない。

散文の語り^に劇的構造を与えたことに加えて、シドニーは技巧を凝らし、各巻(幕)の間に区切りを入れ、一卷(一幕)の次に息抜き的手段として「第一牧歌」を挿入し、その後順次に、第二巻(第二幕)→第二牧歌、第三巻(第三幕)→第三牧歌、第四巻(第四幕)→第四牧歌、第五巻(第五幕)と構造化した。牧歌集は幕間演芸、間奏曲、あるいは主旋律にアクセントを与える装飾音符のような役割を果たす。牧歌集に現れる人物たちは、各巻(各幕)

に登場する人物たちとは別個の配役陣が多いし、彼らの役割は主プロットを推進することではないが、それでも、主筋の物語の音調を設定し、語りの方角を統御して主題を定位するのに一役果たす。牧歌世界という現実離れた異世界で、宮廷世界の貴人たちの行為振舞が羊飼たちの鄙びた歌の中に投影され、これを窺うための遠近法的視点が与えられるのだ。

バシリオス大公の崩御（実は、暗い洞窟の中で、妻とは知らず、妻ギネキアとの同褥の後、朝になって体力回復のため妻に勧められた一種の活性剤を飲んで、その効き目が強すぎたのか、仮死状態になっているのだ）と、パメラ姫との駆け落ちの途中、夜の森の中で山族たちに囚われて連れ戻されたムシドロス王子と、フィロクレア姫と一夜を明かした後、ダメタスに現場を押さえられたピュロクレス王子との投獄に関する語りの後に現れる第四牧歌集は、恋する者の苦悩の歌と死者への哀歌としてルネサンス期のエレジーの二重の性格を開拓する六篇の対になる歌で構成される。初めの二歌で、羊飼ストレフォンとクライオスは愛するユレイニアの不在を嘆く。二番目の二歌では、フィリシデスが愛するミラに夢の中で出会った次第と、彼女に拒絶され別れを惜しんだ次第が歌われ、最後の二歌では、ディコスとアゲラストスがバシリオス大公の崩御を形式的牧歌エレジーと脚韻を踏むセスティナ（六行六連体）で痛嘆する。

四つの牧歌集は各々単一の主題を扱うが、個々の詩は形式において、韻律において多種多様で、その多彩さは、スペンサーの牧歌集を凌ぐ。牧歌の慣例的趣向——歌比べ、対話詩、愛の嘆き、葬送エレジー等もあれば、古典的牧歌には見られない趣向——動物寓話、結婚祝歌、滑稽話、紋章図案等もある。韻律も目覚ましいほど変化に富み、弱強四歩格、弱強五歩格、弱強六歩格の対句、テルツァ・リーマ（三韻句法）、六行連スタンザ、ライム・ロイヤル、リフレインを伴う様々な行の長さから成る九行連、一四行詩、エコー詩、連環詩等が存在する。個々の歌い手は、その性格にふさわしいリズムを付与され、土着のアルカディア人は英語の読者には普通の、音の強弱をリズムとして歌い、高貴な異国人は技巧的な音量詩のリズムを利用して歌う。

四つの牧歌集に含まれる歌に加えて、『オールド・アーケイディア』の散文で書かれた地の文の語りには、五一篇の歌が挿入されている。宮廷人から最も身分の低い羊飼に至るまで、大半の登場人物たちが様々な場面で歌を捻り出す。本作品が歌物語と評される所以だ。これらの歌もまた形式、種類、

情緒などにおいて極めて多様である。シドニーは詩作において様々な実験を重ね、詩に関する自らの考え方を実践し、『アーケイディア』を瞠目すべき多彩な歌物語に仕上げている。

『アーケイディア』の語りの諸特徴について

さて、『オールド・アーケイディア』の散文の語りの文章には、数多くの「アポストロペー」が含まれる。その例をいくつか挙げてみよう。

シドニー作『アーケイディア』には、前述のごとく三種類の作品が存在するが、語りの技法を比べてみると、初稿のいわゆる『オールド・アーケイディア』は、直線的な物語を五巻に亘って展開する。語りの技法は単純であるが、ホメロス以来の「アポストロペー」が多用されていることが当該作品の語りの一つの特徴として挙げられよう。三人称で語ってきた作者が突如、登場人物に二人称で呼びかける形式は「アポストロペー」と呼ばれ、「頓呼法」と訳されるものである。『オールド』の語りの特徴の一つは、物語の途中で作者（語り手）が割って入り、まるでギリシア悲劇の舞台上のコーラスのように、物語それ自体に脚注を加えることである。

例えば、主人公の一人ピュロクレス王子がアマゾン女族クレオフィラに女装して、愛するフィロクレア姫への一途な思いを歌に託して歌う場面に、突然、語り手の合の手が入り、この物語自体を聴いているはずの貴婦人たちに向けて、語り出す場面、

麗しい貴婦人の皆様方、彼女は何度もこの歌を中断しましたが、万一それを繰返しお伝えできましたら、ずいぶん長いこと貴女様方にお楽しみいただけることでしょう。彼女が歌う一行一行には必ずたっぷり溜息の伴奏が付き、口数は少ないけれど、それを言うのにかかる時間の長いことを、溢れ出る涙と一緒にいわば証言しておりましたから。ただ、休みを入れる時間の選び方が極めて適切なため、休止とてハーモニーの妨げになるよりか、むしろ甘美な情熱を募らせるものでした。ムシドロスでさえ（こうした物事を見ては聞くために横になっていましたが）、今まで目にしたどんなことにもまして、クレオフィラの歌い方に感動して、哀れを催しました——心が真の意味で感動すれば、このように活発な作用を引き起こすものなのです。

そして、物語の中でたまたまその歌を聞いた間抜けな羊飼いだメタスの様子を描写して、

さて、貴女様方が彼の礼儀作法なるものをいっそうお気に召して下さるかも知れませんが、それについて二、三言御説明申し上げます。

と注釈を挟む。このように、物語の語り手が語りの中で、物語の聞き手と想定される貴婦人方に語り掛け、注意を呼び掛けるという頓呼法をしばしば用いている。

作者・語り手が、作品自体の語りの中に急に顔を出し、読者等に語り掛け注意を促すという手法は、近代初期の小説でよく使われる手法であり、演劇の舞台でのコーラスの役目を引きずっているようにも思われる。

ところが、『オールド・アーケイディア』を徹底的に改稿して書かれた『ニュー・アーケイディア』には、この類いの語り的手法は一切用いられず、いっそう手の込んだ語り的手法が用いられている。

複雑な語りの構造を備えたシドニーの代表作『ニュー・アーケイディア』は、シドニーが実妹メアリ＝ペンブルック伯令夫人のウィルトン屋敷に寄寓していた1580年には一応脱稿していたはずの『オールド・アーケイディア』を、おそらく82年から84年にかけて、大幅な改訂推敲を施して、全五巻のうち三巻の途中までを起草しながら、戦死のため結局完成できなかった未完の作品である。

『オールド・アーケイディア』は、筋の運びが直截で、時間的な順序に沿って展開され、一人の決まった語り手が物語全体を語るという、伝統的な語り的手法を採用した作品であるが、一方、『ニュー・アーケイディア』は、二人の王子たちが謀略と船火事による二度目の難破のためアルカディアに漂着する前に、小アジアの国々での武者修行の途中で遭遇する数々の冒険とか、今一人の主要登場人物、アルカディア王の甥、アムファイアラスの悲劇的な愛と反乱、及び彼の母セクロピアの王位篡奪の陰謀などの重要な挿話が付加され、より洗練され複雑な入れ子式構造の語りの技法と、より精巧な修辭的文体を駆使して織り上げて、数倍に膨らました作品である。

改稿に際してシドニーの意図は、叙事的作法に則って書き改めるということであった。叙事詩の二大特徴とされるのは、詩の冒頭で詩神に祈願するこ

と、そして“in medius res”《事件の核心から》物語を始めることであるが、『ニュー・アーケイディア』は散文で書かれていながら、この叙事詩の伝統に則って書かれている。シドニー作『詩の擁護』に依れば、叙事詩は必ずしも韻文で書かれなくともよいのであって、散文で書かれることも出来るのであるから。

端的に言うとは、理想郷とされた〈アルカディア〉＝作品としての『アーケイディア』には、即ち、その纏れた迷宮的歪んだ空間＝文体には〈八又の大蛇〉ならぬ〈四又の蛇〉が住む。それらを列挙すれば、

- ① But の多用による振れの文体＝文構造のレベル
- ② アルカディア国を流れる川は蛇のイメージを孕む＝イメージのレベル
- ③ 作品の語りは、蛇のようにくねる＝語りの手法のレベル
- ④ 蛇の図柄はシドニーの精神的鬱屈から生まれた＝内容的主題的レベル

となるが、ここでは、③の作品の語りの手法に的を絞って検討して行くことにしたい。

『ニュー・アーケイディア』の語りの構造、とりわけ、叙事詩的作法として「第二巻」で展開される〈回想の語り形式〉は、複雑微妙な蛇の運動をなぞっているように見える。即ち、「第二巻」では、主人公の王子たちがアルカディア漂着以前に経験した数多くの過去の出来事が数人の登場人物の語りの中で披露されるが、その中で、最も重要な事件は、リュキア国エローナ女王の一件である。愛と嫉妬と裏切りの三角関係を主軸とする非常に込み入ったこの事件は、『オールド・アーケイディア』では、僅かに「第一牧歌」と「第二牧歌」で言及され、作品末で、語り手が自分のペン先は鈍ってしまったので、誰か気概のある詩人にその顛末を描いてもらいたい、といわば下駄を預けた形でオープンなまま終わっているが、『ニュー・アーケイディア』では、登場人物が入れ代わり立ち代わり、各々の視点からこの事件を大々的に物語る仕掛けになっている。

まず、「第一〇章」で、ムシドラス王子扮する羊飼いだーラスが、自らが当事者であるこの事件を第三者の視点からパメラ姫に語り出すが、既にパメラ姫は、やはり事件の当事者であるプランガス王子から直に聞き及んでいるので、辞退を申し出る。エローナ女王が陥っている目下の窮状を哀訴する、

当のプランガスの「嘆き歌」は「第一二章」で、もう一人の当事者であるピュロクレス王子扮するゼルメインに対して、フィロクレア姫の語りの中で紹介され、続いて「第一三章」で、更にフィロクレア姫の言葉で、嘆きの原因が詳しく説明される。この場合、無論、耳を澄ましているゼルメインは、自分が前にかかわった事件、即ち、既に知っている事を聴いているのである。「第一五章」では、満を持して順番を待っていたパメラ姫が、今度は、エローナ女王事件を別の角度から映し出すべく、プランガスの経歴を初めから語り出し、やっとエローナ女王の所まで来た時に、バシリウス公が出し抜けに割り込んで、中断の運びとなる。それから、本当の自分の正体を明かしたピュロクレスが、アルカディア国へやって来るまでの、自らの波瀾万丈の来歴を、長々とフィロクレア姫に語り始め、それが一段落すると、「第二四章」で、フィロクレア姫が再度話を始めようとするが、結局、公妃の命令で、二人の様子を偵察に来たマイゾに邪魔される。そして、突如勃発した暴徒達の反乱と鎮圧の次第が描写された後、最終の「第二九章」で、今度は、バシリウス公がゼルメインに請われて、ゼルメインが全く知らない事情を物語るのである。

このように同一事件が複数の語り手に受け継がれて、次々に視点を変え、内容を絡み合わせ、また、語り手が事件の当事者であるのに、第三者として語るという手法は、まさに蛇がジクザク運動をしているようで、この作品の大きな特徴であり、注目に値する技法である。一つの物語が存在し、その中に別の物語が混在し、その物語を複数の登場人物が複数の視点から物語るといふ、この語りの方法を、リーズ (Joan Rees, *Sir Philip Sidney and Arcadia* (London: Associated Univ. Presses, 1991, p. 87)) に従って、〈メタナラティブ〉と命名して差し支えない。

さらに、作品の内容面から考えても、シドニーがアルカディア国を汚れない理想郷として描いているのではないのは明らかだ。端的にいうと、そこには、どんなに善意的に接しても、決して改心を知らず、王子たちの船火事による二度目の難破の原因を作る、性根までネジ曲がったプレクスルトス、及び、国王の義妹で、何としても息子のアムファイアラス王子への王位継承を目論み、反乱を企図し、姫君たちを奸計によって幽閉して陥落させようとするセクロピア、弟を殺されて復讐の鬼と化し、いかなる手段を講じても、主人公の王子たちに仇討ちを果たしたいと付け狙う、アルタクシアという奸智に長けた二人の代表的な女の蛇が潜んでいるからである。『オールド・アーケ

イディア』に登場しない蛇を『ニュー・アーケイディア』には重要人物として書き込むには、それだけの理由があるはずである。その上、『ニュー・アーケイディア』は遥かに複雑多彩な蛇の文体で織られた精巧な織物であることを考え合わせれば、なぜシドニーがこのような蛇の文体を編み出したのかは、一考に値する問題である。

次に、シドニーの詩論について略述する。

『詩の擁護あるいは弁護』*The Defence of Poesie, or An Apology for Poetrie* (1595) においてシドニーが言うには、

最も崇高な美は自然のなかにこそ宿り、芸術は自然の付属品の領域を出ないものである。創造的能力を備えた芸術家は、自然を変貌させることよりもむしろ、自然をそのまま映しとって、彼の芸術作品に定着させることに努力すべきなのである。・・・人類に与えられた芸術はすべて、自然が作り上げたものをその主たる対象としており、芸術は、自然の作品なくしては成立しえず、又、深くそれに依存しており、自然が開陳しようとしていることの、謂わば、演技者、演奏者になっている。

シドニーに拠れば、芸術家中で詩人はより恵まれた独自の特権を享受していることになる。詩人は、その特別な才能のおかげで、彼の回りの世界を出来るだけ精確に模そうとする試みだけに縛られなくともよい。神は詩人を自然の女神の上位に置かれ、「神の息吹の力」“the force of a divine breath”で鼓舞されて、詩人は、現実世界を超えた自然を創造することができるからである。

詩は・・・何かの再現、模造、あるいは描出であり、比喩的に言うと、教え且つ楽しませるといった目的を持った物言う絵なのである」「詩人は、専ら、模倣するためにのみ創作し、楽しませ且つ教えるために模倣し、人々の心を動かして、楽しみがなければ、見知らない他人から逃げだすために、人々がそこから逃げだしてしまう善を手中に捉えさせるために楽しませ、人々が心を動かされて至る、その善を人々に認識させるために教える。その楽しく教えるという手段によって、美德、悪徳、その他諸々の秀でた

画像を模造することが、詩人を識別する正当な目印なのである。

・・・芸術家の中でも、ただひとり詩人だけは、そのようないかなる隷属的立場にも縛り付けられることを嫌って、彼自身の創意の力によって高揚し、結局はもうひとつの自然と化し、事物を自然が生み出すよりも一層見事に造り、あるいは、自然にはかつて存在しなかったような姿形を全く新たに造り出すのである。・・・そうして詩人は、自然と手に手を取って歩き、自然の贈り物という狭い範囲に限定されることなく、彼自身の知性の十二宮の中を思う存分駆け回る。自然は、色々な詩人たちが織りなしたほどに壮麗なつづれ織りにして、この大地を装ったことはないし、その織物を彩る、それほどにも楽しい川も、実り豊かな樹木も、甘い香りの花々も、その他、この余りにも愛され慈しまれている大地を益々愛すべく美しいものにする何にせよ、現実の自然の中には存在しない。彼女、自然の世界は青銅、詩人たちだけが黄金の世界を産み出すのである。

シドニーの主張

詩は、その甘美さによって人々の心を捕捉し、美德の理想的な絵姿を示して、読む人々の心をそれに向かって動かす力を持っている。詩には人を感動させる力と理想的なものを現実を描き出す力とがあって、この二つの力を同時に踏まえて、詩は「教え且つ楽しませる」とシドニーは強調するのである。

シドニーは、多くの恋愛詩の技巧と気取りと不自然さについて、次のように不平を言う。

しかし、実は、抗い難い恋という旗印の下にやってくるそういう書き物の多くは、もし私が恋される女性であれば、その作者たちが真実恋をしていると私に納得させることなど決してできない類のものである。彼らは情熱的な言葉を、実に冷やかに使う。そういう熱情を本当に肌身に感じているというよりはむしろ、どこかの恋人たちが書いたものを読み、いくつかの大げさな文句を拾い集めてきて・・・それらを適当に繋ぎ合わせて用いる人のようだ。本当の熱情は、私に言わずれば、あの〈迫真力〉“forcibleness” ギリシア語の〈エネルギー〉“Energia”によって、容易に現われ出るものである。

つまり、〈迫真力〉は、詩人の、彼の主題との関わり方の強さと読者を感動、得心させるだけの力を備えた詩的言語の発見という二つの事から生まれるわけである。

- ・以上、シドニーの人生と作品について説明してきたが、イギリス文学史上重要な詩人・作家であるにもかかわらず、シドニーはそれに相応しい扱いを日本では受けていないように思われる。筆者は、詳注付で、彼の詩集や詩論等を日本語に訳し紹介してきたが、シドニーの重要性を日本の読者にもっと知ってもらうためにも、今後とも、シドニーの主要作品を日本語に移すことに微力を傾けたいと思っている。
 - ・以上は、2022年3月に実施された最終講義の後半部分である。
- ・大妻女子大学草稿・テキスト研究所所蔵

ペンブルック伯令夫人のアーケイディア
第8版、1633年刊

